

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 54

August, 2018

関西大学ニュースレター
発行日：2018年(平成30年)8月31日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



力強い歩みを、さらに先へ—— 人材の成長こそ、 組織が飛躍する原動力

- リーダーズ・ナウ —5
在學生— 社会安全学部 4年次生 内田 弦大 さん
卒業生— 大栄窯業株式会社 代表取締役社長 瓦師 道上 大輔 さん
- 研究最前線
日本語教育における反転授業の実践
学生との対面時間を最大限に生かす —7
国際部 — 古川 智樹 准教授
光・電磁波によるイメージングを医療で活用
マイクロ波CTによる乳がん画像診断法の開発 —9
システム理工学部 — 山口 聡一郎 准教授
- トピックス [学内情報] —11
第41回総合関関戦
伝統の戦いで10年ぶりの総合優勝！ ほか
- 社会貢献・連携事業 —13
法政大学・明治大学・関西大学が三大学連携協力協定締結記念
連携企画展「ポアソナードとその教え子たち」を開催 ほか
- 関大ニュース —15
ブータン王立大学ジグメ・ナムゲル工科大学から感謝状を拝受 ほか

■鼎談
野田順弘 株式会社オービック 代表取締役会長
橘 昇一 株式会社オービック 代表取締役社長
池内啓三 理事長

M.NODAX S.TACHI- BANA



●力強い歩みを、さらに先へ——

人材の成長こそ、組織が飛躍する原動力

野田 順弘 ●株式会社オービック 代表取締役会長
 橋 昇一 ●株式会社オービック 代表取締役社長
 池内 啓三 ●理事長



●課題を見つけ、革新し続ける生き方

1968年4月に創業し、本年で50周年を迎えた株式会社オービック。情報システムサービスのトップカンパニーとして、24期連続増益を達成し、更なる発展へと突き進もうとしている。創業者である野田順弘会長、5年前に就任した橋昇一社長の2人のリーダーは、共に関西大学の校友。今回は、このお二人に、創立から132年の長い伝統を守り、更にその伝統を超える未来に目を向ける池内理事長が、株式会社オービック創業の原点、半世紀にわたる成長を支えた特長などをうかがった。

◆モノから技術・サービスへ。変化をとらえ起業

池内 このたびは、株式会社オービックが創立50周年をお迎えになったことに心から敬意を表します。急激に進展してきた情報システムサービスの分野で、これだけの持続的な成長を遂げてきた御社の経営には、本学にとっても、学ぶべきことが多くあるだろうと思っています。本日はその辺りの話をぜひお聞かせいただければと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

野田会長は本学の第二部で学ばれ、卒業後、転職を経て、起業されたのですね。

野田 私は関西大学経済学部第二部で学びました。昼は百貨店の文具売場で働き、仕事を終えると大学の授業に向かいました。当時は、高度成長期真っただ中で、百貨店は日本の生活文化の華というべき場所でした。どのメーカーもこぞって、百貨店との取引を望んだものでした。そんな中で、ある市役所に会計機を納入する商談があり、販売元であるアメリカのメーカーの日本法人に、「当百貨店を通して取引してほしい」と持ちかけたところ、「当社は技術とサービスを、顧客に直接売っている会社であって、百貨店を通しての取引はお断りします」ときっぱり言われました。その時は百貨店を相手にしないことだけではなく、技術を売るという商売の考え方に非常に驚きました。

池内 野田会長や私が若い頃は、モノを作れば売れた時代でした。売るのはモノだけでした。しかし、時代が変わり、今は技術やサービスを売る時代になりました。野田会長はその変化にいち早く気づかれたのですね。

野田 その後、百貨店を退職し、西ドイツの会計機メーカー勤務を経て、独立しました。しかし、当初は資金もないし、メーカーとの取引実績もありませんでした。ちょうどその時、ある電機会社から、オフィスコンピュータが発売され、これを取扱ったのですが、メーカーから直接仕入れるのではなく、販売代理店から仕入れる2次代理店ではどうか、と打診されました。しかし、私たちは顧客とメーカーのバイブ役として、顧客ともメーカーとも直接取引しなければ意味がないと考えて、1次代理店になることにこだわりました。相当苦労しましたが、その時に2次代理店ではとらなかったことが、コンサルティングからシステム構築、サポートまで自社で一貫してお客様に直接提供する、「ワンストップソリューション・サービス」という当社のビジネススタイルの確立につながったと言えます。

◆大学での学びと職業選びの関係とは

池内 天六学舎での学生生活の思い出はありますか？

野田 関西大学の第二部には、公務員、会社員、銀行員など多彩な学生が通い、地下の食堂に集まれば、会社の景気、上司や給料について、あれこれ語り合っていました。彼らの話を聞いて、どの業界もみんな苦労しているなど感じました。特に職場での人間関係、上司の考え方への不満などが多かったように思います。この経験から多くのビジネスの原点を見つけました。

池内 野田会長の学ばれた第二部の学生は皆、目的を持って勉強しに来ていたと思います。だから、真剣です。それが理想で、高校時代に人生をどう生きるかを考えた上で、目的を持って大学に進んでほしい。ところが、大学に入ること自体が目的になってしまっている学生もいます。だから、3年次生になって、初めて卒業後の進路を考える学生が多くなってしまふ。そこがスタートになってしまうと、それまでの大学生活を後悔してしまいかねない。とても残念なことです。大学入学前にもっと自分の将来について考える機会を持てるようになればと思っています。



株式会社オービック東京本社前で

橋 私は1985年商学部を卒業しました。学部を選んだ時は、会計士になりたいとかではなく、漠然と商売の「商」だからと商学部に進みました。ただ、商学部で学んだおかげで私は現在の仕事に進むきっかけを得ることができました。卒業論文で情報システムにかかわるテーマを選んだのですが、この論文に取り組んでいた時に、コンピュータが世の中を変えるかもしれないと感じ、時代の変化に気づくことができたのです。

当初、就職は商社希望で、大手商社に内定していたのですが、卒業論文で触れた情報システムのことが頭から離れなくて、何か情報システムにかかわる仕事、コンピュータにかかわる仕事があったら良いと考えている時に出会ったのがオービックでした。当時、オービックはソフトウェア会社の枠ではなく、商社という枠で紹介されていたのも、応募する動機になりました。入社後に聞いた話によると、高校生の時から、育てた野菜で商売するなど商いに工夫を重ねた野田会長には、商社志望の、商売に関心を寄せる学生に来てほしいという考えがあったそうです。

入社した頃は、社員数700～800人ぐらいで、関大出身の先輩もいました。関大出身者は整ったところでじっとしているよりも、

■鼎談



野田 順弘 (のだ まさひろ)
株式会社オービック代表取締役会長。関西大学名誉博士。1938年奈良生まれ。57年近畿日本鉄道(百貨店部)入社。在職中に関西大学経済学部二部に通い61年卒業。62年会計機輸入販売の東京オフィスマシン入社。68年株式会社大阪ビジネスを設立。74年株式会社オービックに社名変更。13年より現職。07年から11年まで本学客員教授。08年から16年まで、学校法人関西大学評議員。16年より顧問。著書に『転がる石は玉になる 私の履歴書』日本経済新聞出版社刊。

成長するためには、**絶えず過去の成功事例を破壊し、新しい創造に挑戦しなければなりません。**業務においても、**人材育成においても、いつも課題を見つけて、その課題に挑戦し、イノベーションする。会社経営はこの繰り返しです。**

何かに挑戦しながら自ら道を切り開いていくようなイメージが私の中にはあります。先輩たちは関大らしいチャレンジ精神を持つからこそ、挑戦し続けるオービックを選んだのかもかもしれません。私もその1人だったと思います。

野田 多くの関大出身者がオービックで活躍しています。社会に出た時に動じないタイプが多い。関大生のこういう気質は良いですね。人間的な伸びしろが非常にありますよ。

池内 昨今、多様性とよく言われるようになりましたが、関大は昔からいろいろな学生が行き交い、交流していました。

時代は変化するもの。その変化にどう対応していくかは、教育を含め、人と人のつながりの中で学んでいくものだと思います。そういう意味では、関西大学が130年を超える歴史の中で培ってきた、多様な人のつながりは、大きな財産だといえます。先輩と後輩の世代を超えたつながりも、大事にしたいものです。

野田 関大卒の人材は伝統的に打たれ強いですね。

池内 橋社長は若い頃はよく打たれたのですか？

橋 そうでしたね。今も打たれてます。打たれても打たれても挑戦するから、成長があるのだと思います。

◆**絶えず創造に挑戦しなければ成長はない**

池内 これまでの会社経営で、大切にしてきたことはありますか？

野田 50年の間には課題もいろいろありました。課題に対して挑戦せず、過去のやり方に囚われた時には、そこで成長を手放してしまっています。成長するためには、絶えず過去の成功事例を破壊し、新しい創造に挑戦しなければなりません。業務においても、人材育成においても、いつも課題を見つけて、その課題に挑戦し、イノベーションする。会社経営はこの繰り返しです。

オービックでは新卒採用にこだわり、教育、研修を徹底しています。人材育成では、社員が成長するために、課題に挑戦させなければなりません。そのためには、誰もが挑戦しやすい、フラットでオープンな環境を作らなければならない。その環境づくりの一例として、入社1年目から全社員が参加する経営方針発表会を創業当初から実施しています。

今は働き方改革の論議が盛んです。私たちの業界は残業が多いというイメージが強いようですが、当社は残業を極力減らし、業績を伸ばしています。私たちの仕事は、働いた時間の長短ではなく、働いた成果がどうであったか、顧客にどれだけの付加価値を提供できたかによって評価されるものであるという精神を、貫かなければならないと思っています。

◆**創業50周年は出発点。過去の成功よりも未来を見つめる。**

池内 創業50周年は御社の事業や経営を見直す機会になったのではありませんか？

橋 創業50周年を迎えるにあたって、私たちはこれまでの成功事例を捨て、組織も戦略も仕事の進め方もいったん白紙に戻るところから入りました。創業50周年がスタートだという気持ちでした。

池内 橋社長がおっしゃった創業50周年を迎えるにあたっての思いと、私どもが創立130周年を迎えた時の思いは一緒です。今がスタート、未来の関大を思い描こうと思いました。

そして、創立150周年を迎える18年後の関西大学の更なる充実・発展のため、どのような人材を育成するか、どのような学園を目指すのかを考え、行動するための指針として『KANDAI Vision150』を作成しました。この中では、学校法人関西大学全体の将来像と、教育、研究、社会貢献、組織運営の具体的な将来像を描いています。

もちろん、創立130周年を迎える前から、時代の変化への対応に取り組んできました。例えば、国際化を例にとると、外国人留学生のための南千里国際プラザを2012年に設置しました。ここにある留学生寮では外国人留学生5~6人に対して本学学生1人がレジデント・アシスタントとして入居し、一緒に生活しながらサポートをしています。また、2009年に開設した外国語学部では、2年次に全員が海外の提携大学に1年間留学することが必須

なっています。創立150周年を迎える時の関大像をしっかり描きながら、このような取り組みの成果の上に、足らざるを補い、新たなものを加えていきます。

野田会長が学ばれた天六学舎は惜しまれつつ歴史の幕を閉じました。それに代わり、創立130周年記念事業として、大阪の中心地、梅田に新たにキャンパスを開設しました。8階建ての建物に、スタートアップ支援、起業家育成の窓口、異業種交流サロン、キャリアセンター、社会人教育エリアなどを展開しています。人生100年時代の30代、40代、50代の学びの形があるのではないかと考え、これまでの社会人教育とは違うリカレント教育、エルダー教育を提供しようと力を注いでいます。

◆**アホになれ。「なぜ？」と問い、本質に迫る**

池内 社長として、今後の抱負をお聞かせください。

橋 当然、事業を成長させることが経営者としての大前提にあります。そのためにまず、社員にオービックの理念を理解させる教育を徹底したい。社員が成長することが、事業を伸ばすことにつながります。

情報産業では、AIだ、IoTだ、と目まぐるしい技術革新にさらされています。ですから、時代の変化に常に対応できるような人材を、揃えておかなければなりません。詳しい専門知識があるというよりも、本質が分かる社員をつくらないといけないと思っています。そのためには、専門的なことは、ある程度ティーチングしませんが、そこから先は自分で考えて、行動できる社員となるようにコーチングしていきたいと考えています。これは、関大の目指す教育と共通しているのではないのでしょうか。

池内 そうですね。本学では「考動」する、つまり自らの頭で自主的に考え、自律的かつ積極的に行動する関大を育成することを標榜してきました。

最後に、本学に期待することなどあればお聞かせください。



時代は変化するもの。その変化にどう対応していくかは、**教育を含め、人と人のつながりの中で学んでいくものだと思います。**

専門的なことは、ある程度ティーチングしますが、**そこから先は自分で考えて、行動できる社員となるように** コーチングしていきたいと考えています。これは、**関大の目指す教育と共通しているのではないのでしょうか。**



橋 昇一 (たちばな しょういち)
株式会社オービック代表取締役社長。1961年大阪府生まれ。85年関西大学商学部卒。同年4月オービック入社。04年取締役。05年常務取締役。07年専務取締役。08年取締役副社長。13年より現職。16年より学校法人関西大学評議員。

野田 私は社員に、6つの「あ」で行けと言っています。「あせらず、あわてず、あきらめず、あかるく、あつかましく、アホになれ」。かっこつける人間は、相手に合わせるだけで、突っ込んで行かない。「なぜ、御社の経営は利益が出ないのですか？」「情報システムにどういった価値を求めますか？」と課題の本質に迫ることができない。「なぜ？」「どうして？」「もう一度教えてください」、こういう言葉は、真面目で頭が良いだけの人材からは出てきにくい。

我が社が採用で求めるのは、自分を改革ができる人材です。ハングリーな人間も好きですよ。自分の可能性を限定するのではなく、チャレンジする人間が多い、そういう雰囲気が関大にはあります。これからも、固定観念に縛られず、柔軟性を持った人材を育ててくださるようお願いいたします。

池内 啓三 (いけうち けいぞう)
学校法人関西大学理事長。1943年旧満州(中国東北部)生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科を卒業し、学校法人関西大学に奉職。92年評議員。96年総務局長。2000年理事。法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園長を経て、08年専務理事、12年より現職。

LEADERS NOW

トライアスロンで東京五輪へ

3種目すべての強さが求められる

●社会安全学部 4年次生
内田 弦大 さん

スイム、バイク、ランの順で連続して行い、着順を競い合うトライアスロンで、学生王者に君臨する内田弦大さん。ギリシャ語で3を意味する接頭辞“tri”と、競技を意味する“Athlon”の由来の通り、3種目すべてにおいて強さが求められる過酷な競技だ。日々トレーニングを積み、内田さんは2020年東京五輪出場を目指す。



内田 弦大—うちだ げんた
■1997年、滋賀県高島市生まれ。滋賀県立高島高等学校卒。幼少期から中学時代まで水泳、高校時代は陸上で全国大会に出場。関西大学1年次生の夏からトライアスロンを開始。趣味は読書。

クラスしがなく、陸上部も無かったので駅伝チームのメンバーになりました。心肺機能が強かったからか、3kmを9分20秒台で走っていましたね。高校では中長距離の選手として800mで自己ベスト1分53秒89を記録するなど、将来のトライアスロンの下地となる3年間を過ごした。関西大学入学当初は、勉強とアルバイトや友人と過ごす日々だったが、ふと「このままで良いのか」と思うようになり一念発起。1年次生の夏休みに「もう一度夢中になれることはないかと探し、トライアスロンに挑戦することにしました」と過酷な競技の一步を踏んだ。「今まで水泳や陸上の種目単体では、全国で勝つことができませんでした。でも、トライアスロンは3種目すべてで競い合うので、全国でも通用するのではないかと思います」とトライアスロンを選んだ思いを語った。

トライアスロンは、スイム1.5km、バイク40km、ラン10kmの合計51.5km(オリンピック・ディスタンス)を競う。スイムからバイク、バイクからランへと競技種目を転換する「トランジション」のタイムも競技種目について重要と言われ、一瞬たりとも気が抜けない。6月には「NITT ASTCアジアU23トライアスロン選手権」に出場。「スイムは上位で終えて、バイクで先頭集団に入ることが優勝するための鍵」との戦略通り、スイムを6位でフィニッシュしバイクへ移る狙い通りの展開も、最初の2kmで先頭集団から脱落。「良い感じでレース展開出来ましたが、バイクで一気に置き去りにされてしまって……」。その後のランでは出場選手トップの33分37秒でフィニッシュしたが、総合フィニッシュは1位から2分33秒差となる1時間48分26秒で4位に終わった。スイムとランでは本来の実力を発揮したが、経験の浅い課題のバイクでの失速に「トライアスロンは1種目でも実力が不足していたら勝てません。バイクは乗った分だけ強くなるので、更に練習に励み、バイクを強化させていきます」と誓った。その2日後にはナショナルチームの一員としてフランス合宿へと向かうハードな日々を過ごす内田さん。2020年東京五輪出場枠は最大3人の狭き門だが、「現時点では代表選出は厳しい状況ですが、もちろん東京五輪出場を狙います。自分で決めたことなので自分自身を裏切りたくないので」と鋭いまなざしで、五輪出場への意欲を語った。

厳しい練習の合間に、読書で気分転換▶



171.8cm、68kgと目立つ体格ではないが、体脂肪率は約10%。鍛え抜かれた肉体であることが服の上からでも分かる内田さん。「競技も自分もまだマイナーなので、大学の友人からは「弦ちゃん、最近ジムでも通っているの？ なんだか引き締まった体になったね」と言われますよ」と笑顔を見せた。全国52大学144人が出場

した2016年9月開催の「日本学生トライアスロン選手権」の男子の部で優勝し学生王者の座に輝くと、翌年も優勝し連覇を達成。各大会での成績が評価され、現在は2020年東京五輪出場を目指す、公益社団法人日本トライアスロン連合の強化指定選手だ。

ぜんそくの改善と体力強化のため、幼少期から始めた水泳。中学最後の夏には200m個人自由形で悲願の全国大会出場を果たした。「メンバーに恵まれた団体メドレーは全国入賞もしましたが、個人ではレベルの高さを痛感しました」。水泳ではこれ以上強くなれないと終止符を打った。一時は燃え尽き症候群に陥ったが、駅伝の合同チームの一員として出場した高島市や滋賀県の駅伝大会で好結果を残し、高島高校へ推薦入学。「うちの中学は1学年2

いぶし瓦が織り成す日本の原風景を

美しい景観を守りたい

●大栄窯業株式会社 代表取締役社長 瓦師
道上 大輔 さん —社会学部 1996年卒業—

伝統的な瓦業界で、異彩を放つ道上さん。「瓦離れ」が加速する現代において、雑貨やインテリアなど身近なモノから瓦の秘めたる魅力を発信する瓦メーカーの三代目だ。昔から続く瓦屋根が並ぶ良き日本の美しい街並みを取り戻すべく挑戦している。



いぶし瓦が映える銀色の家並と鳴門海峡が織り成す風景画のような街並み。兵庫県の淡路島南西にある海沿いの町を舞台に、日本の原風景を取り戻すべく挑み続ける瓦師がいる。淡路瓦は愛知県の三州瓦、島根県の石州瓦と並び日本三大瓦と称される。淡路島で採掘されるなめ土は、粒子が細かく、美しく仕上がるため「いぶし銀」の美しさとして定評がある。窯元の三代目として、屋根瓦のみならずコースターやゴルフパター、ヒノキと瓦が融合する椅子などで瓦の魅力を発信する道上さんは、「この業界では異端児でしょうね。瓦を使って雑貨や日用品をここまで展開したのは私ぐらいでしょうから」と柔らかな表情を見せた。



瓦の焼き上がりを目視で確認

瓦に囲まれ、妹や弟と工場のベルトコンベヤーやリフトで遊んだ幼少期。「子どもの頃から瓦が好きで、家業を継ぎたいと思っていました。そのためにも一度外の世界を見て経験を積んで帰って来ようと思い、大学への進学を決めました」。関西大学社会学部に入学し、大阪で一人暮らしを始めた。ゴルフサークルに所属し、キャンパスライフを謳歌していた3年次生の1995年冬、瓦業界にも大打撃となる阪神・淡路大震災が発生した。震災後、瓦は震災がれきのイメージが付いてしまったことで風評被害も広がっていた。卒業後に損害保険会社の営業として社会経験を積み、28歳の時、瓦業界を立て直したい思いが強まり、実家に戻り家業を継いだ。「『こんな時代に瓦メーカーを継ぐ人はいない』との声を何度も耳にしましたが、祖父、父の跡を継ぐことは自然の流れでしたから」。逆風の中、会社員時代に培ったノウハウと提案力を巧みな話術で展開し、不況下にもかかわらず得意先を次々と増やしていった。

調湿・断熱効果が高く、土に還る瓦は日本の気候風土において理想の建材でもある。震災を機に淡路島の窯元は200軒から今では70軒にまで激減した。瓦の総出荷額も5分の1にまで落ち込んだが、道上さんは瓦の秘めたる魅力に夢を託した。営業が軌道に乗ると、瓦によるお洒落な雑貨やインテリアを展開する「monokawara(モノカワラ)」ブランドとして販売。業界では異例となる「グッドデザインひょうご2008・2011」、「感性価値創造ミュージアム2009」、「関西デザイン撰2011」など数々の賞に輝き、新聞・テレビなどのメディア露出も増えた。工場の一部を、空間すべてが土と瓦に包まれた“GALLERY&Café 土坐”としてギャラリーに改装し、企業の研修、講演会、観光客向けのコースター作りの体験教室などを開催する。「まずは身近なものから瓦への興味を抱いてもらいたいですね」と笑顔をのぞかせた。



季節の草花が影られた瓦コースター「瓦坐」



淡路瓦400年祭実行委員会代表、南あわじ市活性化委員を務めるなど精力的に活動する道上さんのすべての原動力は、「美しい街並みを取り戻したい」との思いから。「フランス、イタリア、スペインなど世界有数の観光地は例外なく尊厳のある歴史的な街並みになっています。京都や奈良のように、日本の景観美に瓦は欠かせません。いぶし瓦が織り成す日本の原風景を取り戻したいですね」。故郷と同じいぶし銀の輝きを放つ道上さんの挑戦はまだまだ続く。



道上 大輔—みちかみ だいすけ
■1973年兵庫県南あわじ市生まれ。兵庫県立三原高等学校(現淡路三原高等学校)卒。96年関西大学社会学部卒。損害保険会社を経て、2001年大栄窯業株式会社に入社し家業を継ぐ。「monokawara(モノカワラ)」ブランドを立ち上げるなどデザインに優れた商品を展開。趣味はゴルフ。

◀ヘッド部分に兎瓦をあしらった「瓦パター」

■研究最前線

日本語教育における反転授業の実践

学生との対面時間を
最大限に生かす

理解だけでなくアウトプットが中心の外国語教育を

●国際部

古川 智樹 准教授

反転授業とは、従来の基本的な学習を予習としてオンライン視聴させ、授業では知識の定着や応用力の育成に必要な対面学習を中心に行う教育方法。日本の教育関係者の間でも2012年頃から徐々に関心は高まりつつあるが、その適用は一般教養科目が中心だ。日本語教育に反転授業を導入した先駆者である古川准教授は、時代に沿った外国語教育の在り方について模索を続ける。



——2014年秋季学期と2015年度春学期の2期に分けて、実施調査を行ったそうですね。反応はいかがでしたか？

第1期は予習で授業動画の視聴を課し、授業はその動画による説明に対する理解を確認しながら進めました。しかし、教員は動画に「教える」という自分の役割を取られ、授業ですべきことが分からず、結局従来通り教えてしまう。そして、学生はせっかく動画を見ても、同じ内容を授業で説明されると予習をしなくなる。その結果、授業と動画の結び付きが有機的に機能せず、動画は活用されませんでした。

そこで、第2期は予習で動画を視聴し、課題に取り組むこととしました。授業で予習の解説やフィードバックをするスタイルに変えたことでうまく機能し始めました。

——学生の姿勢はどのように変化したのでしょうか？

動画視聴が習慣化され、予習に対する意識が変わったと感じます。肯定的な評価として、「事前に質問を持って授業に臨めるのがよい」という声が多いですね。従来の授業では、その場で学生が質問をすることはほとんどなく、復習する中で分からない点に気づくものの次の日には新しい内容を勉強するので、そのままにしがちでした。一方、反転授業は教員が要点をまとめ、動画の中で分かりやすい言葉で説明していることが重要なポイント。例えば、従来の予習で得られる理解度を50%とすると、繰り返し動画を視聴し70～80%の理解で授業に臨み、解らない点は質問して100%にすることが可能です。学生が学習方法の変化やメリットを認識していることは、アンケート調査の結果にも表れています。

■動画視聴と実践で、“底上げ”と“質の保証”を実現

——反転授業における一番のメリットとは？

一般的に言われるのは、学習理解度の“底上げ”です。理解に時間がかかる学生にとって、繰り返し動画を視聴して予習し、質

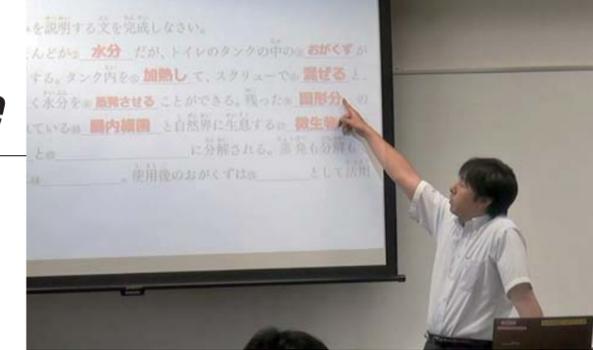


■対話力を重視した日本語教育を

——古川先生と留学生別科の手塚まゆ子先生は、日本語教育における反転授業実践についての共同研究論文が高く評価され、2016年度「日本語教育」論文賞を受賞されました。留学生別科における日本語教育に反転授業を導入した背景をお聞かせください。

留学生別科では、大学・大学院への進学を目的とする別科生を対象に、入学に必要な日本語能力を養成するコースを開講しています。このコースでは、1年間で日本語能力を初級から大学進学レベルにまで引き上げなくてはなりません。そのため、当初はどうしても文法や語彙などの知識の詰め込み教育になってしまい、学生は実践の場で日本語を話せないという課題がありました。そこで、新しい試みとして反転授業を導入しました。

また、関西大学が留学生別科を開講したのは2012年。日本語の予備教育機関としては後発です。当時の日本語教育の中で反転授業の手法はあまり知られておらず、その導入とICTを活用した教育は、大学の特徴を打ち出すという意味でもよいと考えました。



気に撮影し、アップデートは関西大学の講義配信システム「関大LMS」にリンクを貼る形で実現しました。反転授業を教員個人で導入している例はありますが、私たちのように一機関全体で行っているところは私の知る限り他にないと思います。

■テクノロジーを活用し、時代に即した教育を追求する

——今後の課題は何ですか？

私たちの考える授業スタイルは必ずしもすべての教員や学生にマッチするとは限りません。「日本語教育に反転授業はふさわしくない」と考える教員や、従来型の授業を望む学生もいるでしょう。どうやって理解を得るか、妥協点を見出さなくてはなりません。

また、今は小学生がプログラミングをする時代です。小さな頃からICTを活用して学習してきた学生と教員とは、世代が全く違う。反転授業は、教員の役割を教える者からファシリテーター(促進者)へと変えるもの。今後は教員の指導能力を高める実践的な研修も必要となり、教員は教育の世代間ギャップを敏感に感じ取りながら教員自身が学習を続けていかなくてはなりません。

——先生は、記録をデジタル化して残すe-ポートフォリオ等の研究も並行して進めています。今後の展望をお聞かせください。

私が日本語教員を始めた頃は、まだテストの添削を赤ペンで行う紙の時代。単純な問題のマル付けをする時間が無駄に思え、なんとか効率化できないものかと思っていました。eラーニングの登場で、「将来はもっと便利になり、教員の負担は減るだろう」と思いました。しかし近年、学生に任せきりの学習方法には限界があり、やはり教員がどのようにかかわり、ICTを絡めた学習者の学習をどうデザインするかが重要であると分かってきました。どうすればICTというテクノロジーをうまく使って学習を効率化できるのか？よいツールがあっても使いこなせなければ意味がないので、そこを突き詰めていきたいですね。

反転授業の先駆者であるBergman & Samsは、その著書で「教師と生徒が顔を合わせる時間を最大限に生かすためには、その時間をどんな風に使うべきだろうか？」と問題提起しています。言語教育では、教員による説明の時間よりも学習者のアウトプットの練習時間を増やす方が教育効果は望めます。今後はICTの果たす役割が大きくなり、それらを駆使した授業をトータルでデザインすることが必要不可欠となります。教員には、知識や教育能力はもちろん、コーディネート能力やファシリテーターとしての能力、学生と信頼関係を構築する能力などが求められるでしょうね。

現在、私は大学の留学生の授業を担当しており、留学生別科と同じく、文法の習得と定着を目的とする「完全習得学習型」の反転授業を行っています。今後は、実践的な専門知識やスキルの育成を目的とした「高次能力学習型」を導入し、論文や発表に必要な能力を養う授業に取り組んでいこうと思っています。



動画教材
オリジナルの動画教材は、動画の撮影から編集作業、ウェブのアップデートまで、実際に教えている講師陣が協力して行っている

会話練習教材 (e-learning)
授業、自律学習をアシストする e-learning教材 (主に復習用として使用) も積極的に作成し、運用している

研究最前線

光・電磁波によるイメージングを医療で活用

マイクロ波CTによる乳がん画像診断法の開発

効果的な乳がんの早期診断を目指して

システム理工学部
山口 聡一朗 准教授

乳がん患者の増加が止まらない。2017年は1万4000人以上が乳がんで亡くなり、30～64歳の女性のがんによる死因のトップを占めた。乳がんによる死亡を減らすためには、早期発見が重要だ。しかし、日本の乳がん検診の受診率は低く、OECD加盟国の中で最低レベル。社会的課題である乳がん検診の受診率を高めようと、システム理工学部の山口聡一朗准教授が研究開発するのは、マイクロ波CTによる乳がん画像診断システムだ。



定期健診で、気軽に短時間で乳がん検診を

—先生のご専門は何でしょうか？
学生時代は、核融合プラズマ物理学を専攻していました。博士課程で大型のX線CT（コンピュータ断層撮影）装置を作るなどして、X線やマイクロ波による測定と画像化・視覚化の経験を積み、2008年に本学に来てからは、X線やマイクロ波の技術を生かした、応用物理の研究ができないかと考え、医療や宇宙工学などの領域のテーマに取り組んでいます。
—医療関連では、乳がんの診断システムの研究をされているそうですね。

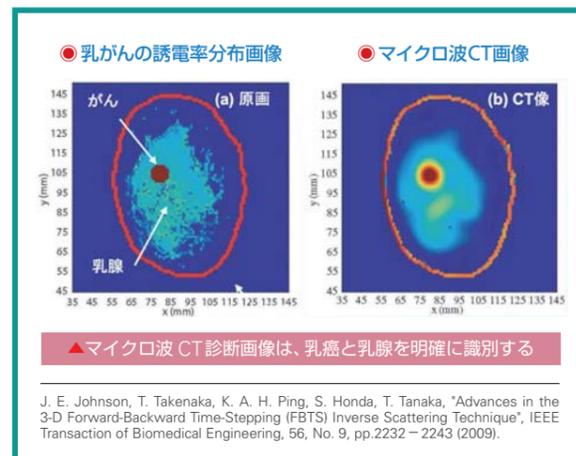
がん組織は成長するとき、毛細血管を発達させて、酸素や栄養を運ぶ血液を集めます。乳房は脂肪が多く、血液量の多い乳がん組織は、油の中に水が浮かんでいるような状態です。そこにマイクロ波を当てると、油と水の境界でマイクロ波の反射や散乱、回折が起こります。それを測定し、コンピュータで計算することで、がん組織の位置、大きさや形を診断できるのではないかと、そういう発想でマイクロ波CTシステムの開発に取り組んでいます。

—現行のマンモグラフィの検査などでは、乳がんの診断は不十分なのではないですか？

マンモグラフィの場合、乳腺外来などの専門病院に行かないと受診できません。そして、X線を当てて診断するマンモグラフィでは、被ばくをなるべく少なくするために、プラスチックの板で乳房を挟んで薄くして検査します。約12キログラムの力で挟むから非常に痛い。しかも、保険が適用されないので、費用がかかる。その上、20代、30代の若いアジア人の女性は乳腺濃度が高く、画像が全体的に白くなってしまい、がんを見逃してしまう可能性もあります。

私たちが目標としているのは、年1回の定期健診で、例えば20歳以上の女性全員が受診できるような装置です。被ばくしない、痛みもない、そして短時間でたくさんの方を診察できるような、

血圧計や体脂肪計ほどの簡単な装置にしたい。できれば大ききさ5ミリ、さらに精度を上げて、2～3ミリの乳がんを検出できるものを開発したいと思っています。

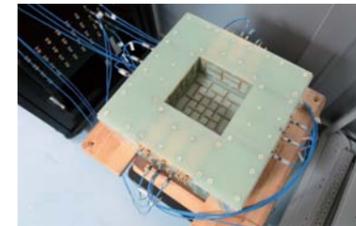


画像の精度、正確さを追求する

—現在はどの程度まで形になっているのですか？
今は、まだハードウェアを作っている段階です。乳がんの模型を製作し、試作機で試してみましたが、期待するような信号はとれませんでした。いろいろな技術的問題があって、それを改良しているところです。

真っすぐに体を透過するX線と違って、マイクロ波は複雑に広がっていくので、1つの発振源に対して、周りから患部を取り囲むようにスキャンしなければなりません。また、マイクロ波は振幅と位相という2つの情報が必要で、処理しなければならないデータが膨大なものになります。

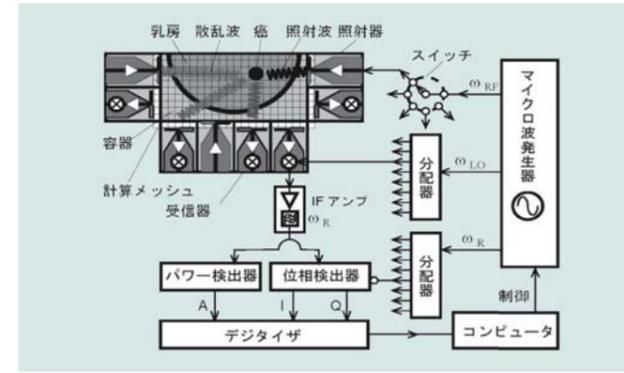
マイクロ波CT 乳がん検診システム



● 安全なマイクロ波CTを用いて位相情報から小さい初期乳がんを可視化する

マイクロ波CTの特長

- 無痛
- X線被ばくしない
- 電気定数で乳腺と乳がんを明確に識別



目標は1、2分で計算処理を終わらせること。それを実現するためには、ただハードウェアの性能や計算処理の速度を上げるだけでは解決になりません。物理学における波の現象をもっと深い部分から考え、本当に必要な情報は何か、何を計算すれば一番早く最も近い答えを得られるかということを考えていかなければならないと思っています。

—技術的に今、特に苦心している点は何でしょうか？

難しいのは位相の問題です。画像の精度、正確さを追求していきますと、電波の場合は位相をどこまで正確に測るかがポイントになってきます。位相は、接続するケーブルを曲げただけでも、ずれてしまいます。1つのプリント基板の中でも、信号線1本1本の長さが違いますが、これも完璧に合わせないと位相がずれて、画像がうまく出ません。さらに厄介なのは、ハードウェアで使う素子の中には、電力によって位相が動くものがあること。これらを完ぺきに調整して、位相を徹底的に合わせ込んでいかないと、正確には画像が出ないのです。

逆に考えると、ハードウェアをそこまで追い込むことができれば、ものすごく繊細な測定も可能になるわけです。位相を調整する方法と技術は、乳がん診断だけでなく地球観測やレーダーから食品検査まで、画像システム全般に広く活用できそうだとこのことが見えてきました。

アイデアを形にする面白さ

—宇宙工学の領域はどんな研究をされているのですか？

X線CTを使って、固体燃料ロケット推進薬の成分の混ざり方を分析し、理想的な原料配合、混ぜ合わせ方、粒子分散を探り、優れた燃焼特性を持った推進薬の開発と効率的な量産化に役立てようという研究です。量産化によるコストダウンは、日本のロケットビジネスの国際的な競争力の向上にもつながります。X線CT測定では、他の研究室の協力を得て、イノベーション創生セ



ンターの装置を利用しています。
—先生の感じる研究の面白さとは？
頭の中に描いたアイデアを具体的な形に変えられることですね。自然現象を観察し、物理的に説明できる新しい法則を見つける研究も楽しいですが、物理学から新しいテクノロジーを発明し、実用化するのも面白いです。

—今後の抱負をお聞かせください。
まずは、この乳がん診断のプロジェクトを完成させたい。医療機器はエラーが許されず、がんの見落としは論外です。また、がんでない人に「がんの疑いがある」という結果を下すことも問題があります。がんの有無を高い確率で診断する装置の実用化までにはまだ数年かかるでしょうけれど、人を救える分野にかかわる研究をしていることに、とてもやりがいを感じます。

そして、日本の新しい産業の真ん中に学生をどんどん送り出したいと思っています。日本の産業界で、次に何が来るかと考えたときに、1つは宇宙工学じゃないかと思っています。関大に宇宙工学の拠点を作りたいですね。宇宙関連の研究をしている本学の先生方をはじめ、他の大学とも協力すれば、関西を宇宙分野のシリコンバレーのような、宇宙産業や研究の集積地に育てられるのではないかと期待を持っています。



山口先生がかぶっている青いヘッドギアはマイクロ波で脳を可視化するCT装置を目指して開発しているもの

Topics ■トピックス [学内情報]

◎第41回総合関関戦

伝統の戦いで10年ぶりの総合優勝!



6月15～17日、千里山キャンパスを主会場として、第41回総合関関戦(関関戦)が開催され、17勝15敗5分で関西大学が

10年ぶりの総合優勝を果たした。関関戦は、関西大学体育会と関西学院大学体育会が互いに良きライバルとして対戦し、親睦を深

める大会として1978年に始まった。

今大会のスローガンは“覚悟”。選手たちは体育会 KAISERS の一員として、10年ぶりの総合優勝を目指し、覚悟を持って戦いに挑んだ。ホームでの開催で勝利を成し遂げた選手たちは、来年の連覇を狙い、閉会式では逍遙歌を高らかに歌い上げ、更なる飛躍を誓い合った。

この度の結果により、関西大学の通算成績は17勝23敗となった。

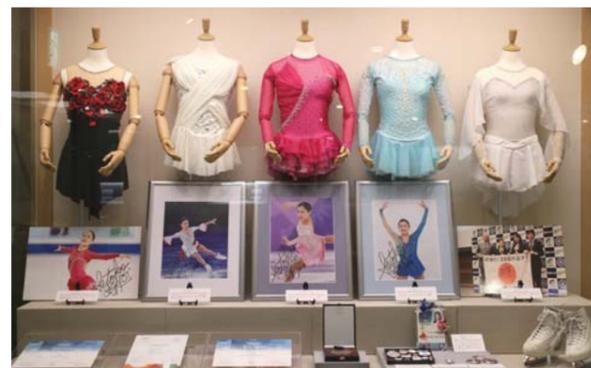
◎特別展「勇気と笑顔と感動をありがとう!宮原知子選手」と学長表彰授与式を開催

諦めずに自分を信じて頑張ろう



体育会アイススケート部の宮原知子さん(文3)の特別展「勇気と笑顔と感動をありがとう!宮原知子選手」(第2期展)が、5月19日～7月25日まで、関西大学博物館常設展示室内の特設コーナーにて開催された。

宮原さんは、2018年2月に開催された平昌五輪女子フィギュアスケートシングルで自己ベスト記録を更新し4位入賞。更に、3月に開催された世界フィギュアスケート選手権で銅メダルを獲得するなど、素晴らしい活躍を取めた。



▲2018年の世界選手権大会で獲得した銅メダル

◀宮原さんが実際に試合で着用したコスチュームや賞状などを展示

会期中、会場には宮原さんが試合で着用したコスチュームやスケート靴、平昌五輪の入賞賞状、世界選手権大会の銅メダルなど、普段は目にすることのできない貴重な品々が展示され、連日大勢のファンが訪れた。

また、6月17日には、学長表彰並びに文学部特別表彰の授与式も行われた。当日はオープンキャンパスも開催されており、宮原さんから高校生たちへ「自分を信じ、お互いに頑張っていきましょう」とエールが送られた。

市民参加型のキャンパス祭開催

今年も3キャンパスが大盛況!

◎高槻キャンパス祭2018

学生と地域住民が多彩な催しで交流



5月27日、総合情報学部祭典実行委員会の企画・運営のもと、高槻キャンパス祭2018が開催された。24回目を迎えた今年のテーマは「High! High! High!」。全員のテンションが「High」になるようなイベントを目指そうと、学生が一丸となって取り組んだ。



当日は、模擬店やフリーマーケットをはじめ、研究発表や講演会、スタジオイベント、応援団による演舞演奏、学生チーム“漢舞”のステージなど、さまざまな催しが行われた。また、総合情報学部ならではの3Dプリンターやレーザーカッターを使った「ものづくり工房体験教室」や、高槻市の人気マスコットキャラクター“はにたん”と一緒に踊る「はにたんダンス」など、来場者と一緒に楽しめる楽しい企画も満載。約2,500人もの来場者があり、キャンパスは終日大いににぎわった。



◎堺キャンパス祭2018

笑顔あふれるイベントで地域とつながる

6月3日、人間健康学部祭典実行委員会を中心に、第8回となる堺キャンパス祭が開催された。今年のテーマは「笑顔満祭!人健万祭!~来たらええとこあるさかい~」。世代を超えた大勢の方に、笑顔で楽しんでほしいという思いが込められた。



当日は、晴れ渡る青空の下、同実行委員による準備体操「堺子体操」などのステージ企画や、サッカー、車いすバスケットボール等のスポーツ教室、堺市が実施する「おふるのススメ」等、地域社会との連携を推進する人間健康学部ならではの多彩な催しを実施。キャンパスは、約1,300人の来場者の笑顔で彩られた。



◎第4回高槻ミューズキャンパス祭

体験型企画で楽しみながら学べる



6月24日、社会安全学部祭典実行委員会が主体となり、高槻市の協力のもと、第4回高槻ミューズキャンパス祭が開催された。今年のテーマは「防災WORLD2018~防災の世界が丸見え~」。防災について学ぶのはもちろん、防災の世界を丸見えにすることで、身近なところから防災に取り組むことを知ってほしいという願いが込められた。

18日に発生した大阪府北部地震の影響により、中止も検討したが、地震で被害を受けた方々の笑顔を取り戻すため、当初の予定から内容を一部変更して実施した。自治会による炊き出しランチや、学生による模擬店、身近なものでできる防災グッズ作り等を実施した。オープンキャンパスも同時開催され、梅雨の晴れ間の中、学生や地域住民、高校生など約2,500人が来場して、笑顔あふれるキャンパス祭となった。

■社会貢献・連携事業

◎法政大学・明治大学・関西大学が三大学連携協力協定締結記念

連携企画展「ボアソナードとその教え子たち」を開催



法政大学・明治大学・関西大学三大学連携協力協定締結記念特別展示「ボアソナードとその教え子たち」が、7月7日～8月5日、明治大学博物館特別展示室にて開催された。

3大学の前身を立ち上げた創立者は、いずれも1870～80年代に、明治政府の法律顧問として来日したギュスターヴ・エミール・ボアソナード博士より教えと支援を受けた若き法曹家であるという共通のルーツを持つ。そこで、3大学は2017年9月に連携協力協定を締結し、それぞれの理念や特色を生かした大学間連携活動を通じて、相互の教育・研究の一層の進展を目指してきた。本企画展もその一環として開催され、ボアソナード博士にまつわる資料を展示し、博士の事績とその意志を継いで法曹普及に努めた教え子たちの足跡をたどるとともに、各大学の活動を振り返った。

また、企画展に先立ち、開幕セレモニーが7月6日、明治大学駿河台キャンパスにて挙行され、3大学の学長と総長が更なる連携強化を確認した。終了後には、明治大学史資料センター所長の村上一博教授による記念講演「ボアソナードと三兄弟」も行われ、歴史的な観点からボアソナードと3大学の関係性を振り返るとともに、各大学の建学の精神を見つめ直した。



◀ボアソナード博士の肖像画と胸像

◎スカイマーク社との共同授業「プロジェクト学習(航空業界を知る)」を開講

学部横断で航空業界のリアルな課題解決に挑む



専門分野の基礎を習得した上位年次の学生が、学部を横断して社会の課題解決に取り組む「プロジェクト学習(航空業界を知る)」を千里山キャンパスにて開講した。

関西大学では、各学部での専門教育に加え、多彩な知に触れ、多様な個性を学ぶ共通教養科目を設置している。当授業はその科目の一つとして、PBL(課題解決)型の学習形態をベースに、文献調査やインタビュー等、グループ活動の主体的な学びを通じて課題解決に挑むというもの。



空港内でのフィールドワーク

第1回目の6月16日は、スカイマーク株式会社代表取締役社長の市江正彦氏、広報PR室長の天野美香氏による講義が行われた。学生たちはスカイマーク社の歴史やビジネスモデルに触れながら、経営破綻や事業改革への取り組み、職務内容についてなど、貴重な話を耳を傾けた。続く23日は、スカイマーク神戸空港支店でのフィールドワークが実施され、学生たちは空港内を見学し、地域共生やCS(お客様満足度)向上への取り組みを学習した。その後の授業では、グループで関西における地域共生案、CS向上施策案、スカイマークPR戦略案、スカイマーク新規事業案の4つの課題解決に挑戦。7月14日の最終報告会では、学部の枠を越えた総合大学ならではの多様な視点から、熱い議論を交わされた。

◎社会安全学部学生が充電ボランティアを実施

防災・減災の学びを災害現場で生かす

6月18日の朝に発生した大阪府北部地震。震度6弱の大きな揺れは、府北部だけでなく、震源地から離れた府南部や兵庫県にも影響を及ぼし、交通機関が混乱した。

震源地からほど近い関西大学高槻ミュージックキャンパスは、構内に防災機能を整備しており、緊急避難場所として活用された。

一方、日頃から自然災害や社会災害に関する調査や対策に取り組んでいる社会安全学部の永松伸吾教授と学生たち15人は、発電機を持ち出して、JR高槻駅で携帯電話やスマートフォンの充電ボランティアを実施。情報はSNSで拡散され、14時から開始して16時過ぎには設置場所が2カ所に増設された。ボランティアは深夜まで行われ、連絡手段に困っていた約200人の市民が利用した。

参加した学生は、「自分よりも困っている人のために、何かできればと思った」、「利用者同士が譲り合って使っていて、他の人を気遣う気持ちが伝わってきた」と、今回の非常事態を振り返る。また、今の時代はスマートフォンが欠かせないことを痛感。聴覚障害の方からの「公衆電話が使えたとしても私たちは利用できないため、SNSが使えるようになって良かった」という声を聞くなど、多くの気づきがあったと語った。



①ボランティアに参加した学生たち ②駅構内でも充電サービスを提供 ③発電機を利用し携帯電話を充電をする人々 ④テレビ局の取材を受ける学生ボランティア

◎社会学部・黒田ゼミが、天満天神の水をリブランディング

聖産学連携による梅サイダー「UME・TEMMA」を開発



「UME・TEMMA」のポスター(上)と学生を起用したポスター(左)

社会学部の黒田勇教授のゼミに所属する学生チームが、聖産学連携による新商品として、大阪天満宮の水、紀州の梅果汁、ハタ鉦泉の炭酸水を使用した、ご当地梅サイダー「UME・TEMMA」を開発した。

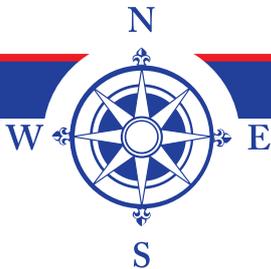


▲浴衣姿で「UME・TEMMA」をPRする学生たち

大阪天満宮から湧き出る天満天神の水は、江戸時代に「大阪四清水」の一つとしてうたわれた名水で、軟水特有のまろやかな口当たりが特徴。梅サイダーには、その水を“ご”利益の“5”%の分量で配合し、神様のパワーをふんだんに詰め込んだ。

3年がかりで新ブランドを創り上げた当チームは、「大阪の伝統は残しつつも、おしゃれで都会的なイメージを表現したい」と、天神橋筋商店街を中心に浴衣姿でPRを展開。売り上げ10万本を目標に、7月24・25日に開催された大阪夏の風物詩・天神祭へ出店し好評を博した。なお、売り上げの一部は大阪天満宮へ「お気持」の形で奉納する。

天満天神の水は、戦後になり一度は枯れてしまったものの、2014年に地元商店街と関西大学の連携事業により復活。新しい活用方法を目指した結果、今回の再々生事業につながった。



ブータン王立大学ジグメ・ナムゲル工科大学から感謝状を拝受



▲ブータン王立大学ジグメ・ナムゲル工科大学アンデュ・デュクパ学長からの感謝状を、NPO法人国際建設機械専門家協議会代表の白井氏(右)から手渡される芝井学長

関西大学は、2016年6月にブータン王立大学と基本協定を締結し、理工系学部の教員が中心となり、ブータン王立大学ジグメ・ナムゲル工科大学での機械工学科開設に向けて支援してきた。この度、ブータン初となる4年制の機械工学科が2019年7月に開設されることとなった。そこで8月7日千里山キャンパスで、NPO法人国際建設機械専門家協議会の白井一代表を通じて、同大学のアンデュ・デュクパ学長からの感謝状が芝井敬司学長へ手渡された。

感謝状には、「日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンス)」や「日本型教育の海外展開推進事業(EDU-Portニッポン)」での交流、本学元教員の緒方正則先生による現地指導など、4項目にわたる感謝の意が記されている。本学の長きにわたる理工系教育実績や知見を生かした協力を展開し、同国の更なる発展に貢献することが期待される。

2019年度より難民を対象とする推薦入学制度を導入

関西大学は2019年度入試より、日本国籍を持たない難民の就学をサポートするため、UNHCR難民高等教育プログラム(RHEP)による学生の受け入れを決定。関西大学で就学を希望する難民に門戸を開く。

本制度の導入により、多様な経歴を持つ学生の受け入れによるダイバーシティの推進などが期待される。今後は、関西で2校目となるRHEPのパートナー校として、国際社会への貢献を積極的に果たすとともに、国際的にも高まりつつあるSustainable Development Goals(SDGs:持続可能な開発目標)の推進にも寄与していく。

スポーツ庁「日本版 NCAA創設事業」に採択 学生アスリート向けキャリア形成支援プログラム『KSAP』が始動

関西大学独自の学生アスリート向けキャリア形成支援プログラム「KSAP(ケイサップ:KAISERS Student-Athlete Program)」の実践が、2018年度のスポーツ庁「日本版NCAA創設事業」に採択された。採択校は全国で15校。そのうち、関西からは本学のほかに、大阪体育大学、立命館大学、武庫川女子大学が選ばれた。

日本版NCAAは、全米体育協会をモデルとする大学横断的かつ競技横断的統括組織として、2018年度内に創設される予定。KSAPは、地域社会における健康増進、余暇の充実を担う指導者の育成を主たる目的とし、今後は学生アスリートに特化したキャリア形成のためのプログラム、ポートフォリオを活用した学生アスリートへの修学支援、褒賞制度や奨学金制度の活用など意欲向上のための支援を展開する。また、一般社団法人大学スポーツコンソーシアムKANSAIやNPO法人関西大学カイザーズクラブ、自治体等と連携し、関西の大学スポーツをリードする私立大学の一つとして、日本版NCAA創設に貢献することを目指す。

体育会バレーボール部女子が 春季リーグ戦で悲願の初優勝！

4月8日から開催された関西大学バレーボール連盟春季リーグ戦において、体育会バレーボール部女子が9勝2敗の成績を収め、創部以来初となる1部リーグ優勝を果たした。



写真提供：関大スポーツ編集部

また、優勝とともに個人賞の授与も行われ、最優秀選手賞とレシーブ賞に服部愛果さん(法4)、セッター賞に川西花菜子さん(人3)が選出され、メンバーと一緒に喜びを分かち合った。

全日本大学ソフトテニス王座決定戦で 田中純さん、中別府瑞希さんペアが準優勝



写真提供：関大スポーツ編集部

6月21日～24日、福岡県北九州市・穴生ドームで開催された第38回全日本大学ソフトテニス王座決定戦の女子ダブルスにおいて、体育会ソフトテニス部の田中純さん(人4)、中別府瑞希さん(文1)のペアが準優勝に輝いた。さらに、西岡真里華さん(文4)、中崎萌さん(文3)のペアが3位に入賞。女子団体でも、関西大学は3位という好成績を収めた。